

**マラソン大会を通じて
障害者の社会参加を促す**

4 月初旬、まぶしい日差しが照りつ
ける中、真つすぐに引かれたスタ
ートラインに並ぶランナーたち。みんな
どこか緊張した面持ちだが、これから始
まるイベントに胸を躍らせている。
「水分補給はしつかりと。無理はしな
いこと！」

そうハキハキと声を掛けられているのは、
夏季オリンピックの女子マラソンで二大
会続けてメダルを獲得した有森裕子さ
ん。ここは中東の国ヨルダン。現役引退
後、自らNGOを立ち上げてスポーツを
通じた国際協力に取り組んできた有森さ
ん(18ページに関連記事)。カンボジア

を中心に独自に活動を展開してきたが、
今回は「なんとかしなきゃ!プロジェクト」
ト※「著名人メンバ―としてヨルダンを
訪問することに。青年海外協力隊の上岡
廉さん、相坂慎吾さんが企画した「知的
障害者のマラソンへの挑戦」をサポート
することが主な目的だった。

ヨルダンでは、社会的に弱い立場にい
る人たちの社会参加の機会が限られてい
る。特に障害のある人に関しては、スロ
ープや点字ブロックなどのインフラの不
足に加え、周囲の偏見などが残っている
ことも影響している。上岡さんらの派遣
先である障害者施設「カラク・ケアセン
ター」では入所者が、外へに出て行く機
会を増やそうと、地域の清掃活動への参
加、スポーツジムでのトレーニング、軽

有森裕子さん

**障害を乗り越えて走る
死海マラソン inヨルダン**

現役引退後、NPO法人ハート・オブ・ゴールドの代表理事として
スポーツを通じた国際協力に取り組んできた有森裕子さん。
今年4月、中東のヨルダンで開催された「死海マラソン」に
知的障害者の伴走者として参加。
国境を超えて生まれる、スポーツの力を実感した。



田淵さん(上写真中央)の生徒たちが作ってくれた応援旗は、多くのラン
ナーたちの励みとなった。有森さんも自ら手に取って伴走(下写真)

度障害者への就労支援などに取り組んで
きた。
そして上岡さんが新たに企画したの
が、ヨルダンで年一回開催されている「死
海マラソン」への挑戦だった。「死海マ
ラソン」は「体が浮く、ことで有名な死
海周辺を舞台にしたマラソン大会。フル
マラソンの場合、標高900メートルの
スタート地点から標高マイナスイナス400メ
ートルの死海を目指して走る。ゴール地
点の標高が世界で最も低いことで有名
だ。「障害者の社会参加を実感できる良
い機会だ」と思ったんです」と上岡さん。
最初は「マラソンなんて危険だ」と反対
されたが、隊員たちは粘り強く話し合い
を重ねた。そしてついに2010年、日
本人ボランティアによる伴走付きを条件
に、知的障害者の10キロコースへの参加
が実現したのだ。

それ以来、上岡さんはずっと「いつか
有森さんに伴走者として参加してもらえ
たら」と考えていた。そして2012年
4月、ついにその夢が実現。走る速度も
体力も違う参加者と、どのように安全に
伴走してもらうかなど課題は山積みだっ
たが、別の障害者施設で活動する安藤未
来さんら他の協力隊員の協力も得なが
ら、一致団結して準備を進めてきた。最
終的にはJICAヨルダン事務所やアメ
リカのボランティア団体、障害者施設の
スタッフなど40人近くの協力者が集まっ
た。

**国籍・人種・障害を
超えるスポーツ**

マラソン大会の前には、ヨルダン国内
の青年海外協力隊の活動現場を見て回っ
た有森さん。首都アンマンにあるパレス

特別レポート

文=戸倉裕子(JICA職員)
写真=久野真一(JICA広報室)



「第19回死海マラソン」で知的障害者の
伴走をする有森さん。
企画者の上岡さん
(右)らの努力により、
障害者の社会参加へ
の道が切り開かれた

チナ難民キャンプ内の学校では、田淵和
恵さんがアラビア語で美術を教えてい
た。有森さんが「死海マラソン」に出場
すると聞き、この日の授業は応援用の旗
作り。「田淵先生の授業はどうですか」
と生徒の一人に話しかけると、「いつも
愛情いっぱい接してくれる。学校に来
るのが楽しみです」と恥ずかしそうに答
えてくれた。他の学校でも、隊員の三角
梢恵さん、森本和馬さんの体育の授業を
視察し、準備体操やランニングにも参加。
有森さんは「体を動かすと気持ちいいよ
ね」と生徒たちに声を掛けていた。
そして迎えたマラソン当日。午前中
にもかかわらず、すでに30度を超える暑
さに見舞われたが、10キロのコースの参
加者は実に3000人以上。大音響でク

ラブ音楽が流れる中、
スタート地点は開始を
待つ人たちの熱気であ
ふれていた。中には車
いすの参加者も。道端
でラクダに乗った少年
がその様子を眺めてい
るのもヨルダンらしい。
「ピー!!」。ホイッス
ルの音とともに、一般
参加者に続いて20人の
知的障害者ランナーが
伴走者とともに走り出
した。先頭は有森さん
だ。覚えたてのアラビア語で「ヤッラ!
(Yes, yes)」と大声でみんなを励ます。
途中、沿道からは難民キャンプ内の学校
で作られた旗が力いっぱい振られてい
た。そして約3時間後、全員が満面の笑
みでゴールラインを踏んだ。

今回のヨルダン訪問を「とても貴重な
体験だった」と振り返る有森さん。スポ
ーツを通じた交流は、「国籍・人種・障
害の有無の壁を超える」ことをあらため
て実感したという。「私自身、たくさん
の人に応援してもらって選手生活を送る
ことができた。スポーツを通じて応援し
ていくことで、今度は私がみんなに元氣
を与えていきたい」。有森さんはこれか
ら、マラソンレースで、そして国際協
力の現場で走り続けていく。



協力隊員が活動する幼稚園も訪問。小さな子どもたちが有森さんの周りに集まり、
アラビア語で一生懸命に話しかけていた



難民キャンプ内は男女別の学校が多い。協力隊員
の活動する学校でジョギングに参加する有森さん

※途上国の現状について知り、一人一人ができる国際
協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委
員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JAN
IC)、JICA国連開発計画(UNDP)。